ちしい、分相應といふ、是その事、百姓は百姓、町人は町人、明治廿八年乙未秋八月、孫植撰書并建

## 醉月亭八景

敲月樓主人

蘇峰の雪

たち昇る煙にむすふ白雪の軒端に寒き阿曾の遠山

白川の月

都人見にもこよかし名にし立つ波に去らゆふ白川の月

無常堂の煙

起つとみる人の煙の消えゆくは是ぞ常なき世の詠なる

河瀬の水車

朝夕にめぐる河瀬の水車なるれは聲も靜けかりけり

出水神社の花火

窓近くいづみの杜にうちあぐる花火や空の星と落來る

錬兵場の喇叭

をさまれる世にもらつぱの聲聞ゆ雲のみたれや吹留むらん

子飼橋のゆきゝ

ゆく人の影を空にと見渡せは去たにかゝれり虹のかけはし

木幡神社の神樂

すゞしむる木幡の宮の朝神樂神の慮も人のこゝろも

泰勝寺の廢れたる跡をこて

吹すさぶ松の嵐にこと問はん今は幾世かふる寺の跡

肥前の名古屋城跡のふるき圖をみて戯に

よくこれはよく〳〵手に入るよき人のよしとさためしよき跡よく見て

同し所の廣澤寺といふ寺の蘇鐵のかたこて

ひろゝれる廣澤寺のそてつにも君か心のうたこ去るしも

同し所の古瓦

連りし雲ねの甍さながらに高き名ゝやのなゝり朽せす

雞聲茅店月

影みれはいよ〳〵さむし雞がなくかやの軒端にあり明の月

人跡板橋霜

踏みし跡にまたもやむすふ朝霜の去ら川橋をひとりゆくかも

山寺暮鐘

なかむれは高峰の月に音すなり槇のを山の入相のかね

朝霧

あさ日影のはるにつれて立田山麓おりくる峰の朝霧

鳥かねに曉いそくまずらをは枕にむすふうたゝねの夢

生繁る草木の麓ありてこそ雲ゐを凌く山はたつるらめ

あしひきの山路の露にくちまさる袂にもるゝ峯の月影

旅人の往來たえぬる小夜中は月こそ渡れ野路のかり橋

瀧近

それとしも定りつゝ雨と聞きまがふ枕に近き瀧つせの音

夕霧

夕日かけ殘る梢もはるかにて霧たちこむる遠の山々

月出山

八重の雲をふく松風にはらゝせて枝さしのはる山の端の月

秋閑居

荻の葉に秋の初風たちしよりわか柴の戸を訪ふ人もなし

寄月憶人

なか〳〵にてりまさるこそ悲しけれ共になかめし人のなければ

詠史

難波津にさかえし花もふく風にちりて流るゝ淀の川水

冬月

むらしくれさそふ嵐に影さえて霜と見るまで氷る月影

月夜閑居　讀人知らず

つれ〳〵と文みる窓に入る月を去らぬむかしの友とこそすれ

客夜述懷　山内出雲

身をおもひ家を思ひの旅枕いかにまよひの夢かむすばん

夕暮に飛ぶ鳥を見て

ゆふされば飛ひかふ鳥も子を思ひ親をこふとて立急くらん

道の忽にすべからざるを思ひて

ふみまよふ道をまことのみちとしも思ひ入るこそ迷ひなりけれ

暮秋山居　蝶々子

みちは千草に埋もれて　柴の戸たゝく人もなし

夜半の寢覺にきくものは　峯よりおつる鹿の聲

閑居の情景寫えてよし